（C）日刊スポーツ新聞社

2014.7.23→2020.7.24

1964➡2020東京五輪と繁華街の今昔

20年まで300回超 大型連載第117回

荒木町

芸者の名残感じる街

昭和30年代の荒木町の芸者たち。街並みはまだ温い料亭などの黒塀はかりだった　鈴木洋一さん提供

64年当時を振り返った鈴木洋一さん

黒塗り塀と黒塀

三味線の音色が路地に漏れる午後3時。夜のお座敷が近づくにつれ、芸妓たちは慌ただしくなった。薄暮くなると黒塗りの高級車が、舗装されていない砂利道を鳴らしながらゆっくりと黒塀に囲まれた荒木町に入ってきた。

政界、財界、芸能界の大物が黒塀の中に呼ばれていく。料理と酒、芸事を楽しんだ後は時に料亭の裏口からそっと消えていった。1964年（昭39）10月、1回目の東京五輪が華々しく行われていた時分、荒木町は五輪のムードすら受けけていなかった。

58年創業のこんぶの鈴新（の店主、鈴木洋一さん（70）は「時代高校2年生。一花柳界の芸者さんがたくさんいた。外国人は指無で日本の一般客もお見えになれない状況だった」。

黒塀も重要だった。「黒は物を曝す意味。裏口から出られるしつらえもあった。政治談議だけでなく、ひっそりしんべんのセンガンもやってたかな」と笑った。

荒木町は、芸能界の大物が黒塀の中で、芸者を楽しんだ後は料亭の裏口からそっと消えていった。

東京大会アーカイブ（下）

現在も残している、日本を代表する高級商店街「銀座」「眠らない街」歌舞伎町」などと、64年前後の様子と2020年以降を見据えた取り組みなど、アーカイブ月間最終回は、東京五輪と繁華街の今昔物語に焦点を当てる。【三須一紀】

五輪開催時、東京の顔の一つとなるのが繁華街だ。“メイン会場”となる新国立競技場（新宿区）から最も近い繁華街が、四谷3丁目交差点をはさんだ荒木町。1964年（昭39）の東京五輪時には芸妓（げいこ）が行きかう花街だった風情を、今も残している。

家康の「策の池」

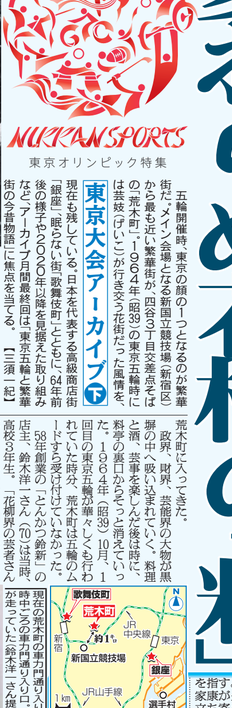
◆荒木町（あらきちょう）東京都新宿区にあり、地下鉄丸ノ内線の四谷三丁目駅と都営新宿線の曙橋駅の間に挟まれた地帯。明治時代に入り、屋敷の一部が一般開放され、歌舞伎狂言などを上演する芝居小屋ができ、店が増えていった。花街として栄えたのは1904年（明37）の日露戦争以後との説もある。1928年（昭3）には芸妓屋80軒余り、芸妓200人以上という記録もある。

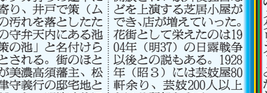
荒木町に入ってきた。

政界、財界、芸能界の大物が黒塀の中で、芸者を楽しんだ後は料亭の裏口からそっと消えていった。1964年（昭39）10月、1回目の東京五輪が華々しく行われていた時分、荒木町は五輪のムードすら受けけていなかった。

58年創業のこんぶの鈴新（の店主、鈴木洋一さん（70）は「時代高校2年生。一花柳界の芸者さんがたくさんいた。外国人は指無で日本の一般客もお見えになれない状況だった」。

黒塀も重要だった。「黒は物を曝す意味。裏口から出られるしつらえもあった。政治談議だけでなく、ひっそりしんべんのセンガンもやってたかな」と笑った。





歌舞伎町

24時間眠らない街

59年4月の新宿歌舞伎町の映画街　正面が新宿ミラノ座、右はグランドオデオン

斬新観光ガイド

1958年（昭33）、売春防止法が施行され、赤線（公認売春地域）も廃止になった。「歌舞伎町商店街振興組合の歩み」によると、赤線地帯だった新宿2丁目にいた娼婦（しょうふ）らが歌舞伎町に流れ込み、無法状態での売春行為が横行した。キャバクラなどの社交飲食がこの頃から増え、64年東京五輪をまぢかに、65年ごろになるとノーブランドなどが誕生していった時代だった。

一方で五輪時には代々木に選手村が開村、外国人も多く訪れた。五輪エンブレムのワッペンを店員が着けた「英語（ロシア語、スペイン語）に対応する五輪通訳協力店」も指定、歌舞伎町の歴史に詳しい関係者によれば、「警察の調査でヤクザを、時踊間さされた」。

同組合の城克事務局長（69）写真は「歌舞伎町はある程度の緊張感を持って来てほしい、ターゲットは家族連れ」と話る。現在は日、20万～25万人が訪れる。昨年に新宿コマ劇跡地にオペラシティが誕生、シネマコンプレックスが入った。1日の利用者数は1万～2万人とい、もちろん大きさは様方であるが、歌舞伎町中、約4000店舗が風営法で規制される「夜の店」、共存は不可欠だ。

昨年、新たに取り組んだのが斬新な観光ガイドづくり。飲食店だけでなく、キャバクラやホストクラブまで掲載、普通のホテルの女性従業員もホストクラブを体験するなどして、観光客にガイドできるようにした。

20年以降を見据えたテーマは「24時間眠らない観光施設」。訪日外国人がいつ到着しても、ホテルに行く、街で食事をするなどの、そのための空港直結バスターミナル設置が当面の目標だ。

「夜の店」と共存しながら観光拠点に

靖国通りから見た現在の歌舞伎町中央通り

外国人を排除するつもりはない。しかし、あえて宣伝して呼び込もうという思いもない。「五輪は一時、街はずっと続く。地に足がついた商店会にしたい」。

荒木町を好きになった客がまれにでも、次の客を呼ぶ。新国立競技場からわずか1キロでも五輪は関係ない。じっくり、ゆっくりと発展していくことが、荒木町の粋だった。

銀座

表情を変えていく街

64年4月の銀座の街並み

時代の先端行く

1949年（昭24）、三十間堀川が埋め立てられ、銀座の川はなくなった。64年東京五輪に合わせ、高速道路が整備され、景色は一変した。

金銀座会が14年10月に立ち上げた東京五輪・パラリンピック対応委員会（320人）の竹沢えり子事務局長は「そもそも銀座は時代の最先端を行く企業などが出店し、表情を変えていった場所」と語る。

昭和初期には性サービスもあった「カフェー」が軒を連ねた、バブル期には銀行が表通りに出店。「時代は変わったと思える。

高級店のイメージが強いが現在は、ユニクロなどのファストファッション店や免税店が立ち並ぶ。それでも商店会は各企業と話し合い「安くて買える商品」や「買う意味のない特別な商品」を作り、「銀座ブランド」を守ってきた。

現在の銀座の街並み

バリアフリー化推進 ブランド守る

20年東京五輪に向けて、「選手村に一番近い繁華街」として街づくりに取り組む。「銀座はエレベーターが少ないが、これからハード面を大幅に変えるのは難しい」と9202の永井真吉さん（写真）。ソフト面でのバリアフリー化を目指し、各企業、店舗の従業員に「ユニバーサルマナー検定」の受講を呼びかけ、現在200人以上が受けてきた。

銀座の高級クラブでも英語メニューを置いたり、バリアフリー意識が高まっている。全ての通りに、それぞれの魅力がある銀座は個店の発信力も重要だ。

「以前はライバルの街はどこだろうと考えた。でも銀座は無違いない」と竹沢さん。今後、中央通り歩行者天国を拡大するなど、自慢できる信頼感を上げていくという。

「銀座は、ここで買えば間違いない、季節も感じられる街に変わっていく。」

卓球場はどこにある？始める人が増えている！体育館、公民館、カルチャー教室、町のクラブ…

石川佳純（全農・ニッタク契約選手）

ビギナーこそ、きちんとした用具で始めたい 特に、ボール！均一なバウンド「Jトップ」で!!

リオ五輪後、以前に増して卓球が話題にされる。その中で、「卓球やりたいけど、どこに行けば出来るかな？」ニケットはどうすればいいのかな？」という声も多く聞かれる。

オリンピック開幕後も、卓球熱はまるばかりで、マスコミへの登場も多い。日常会話で「卓球やりたい」は、というフレーズもよく聞く。実際に、卓球人口は増えているのだろうか？東京の会員制卓球クラブ「T-S」（西麻布）の関係者によると、「問い合わせが、従来もあるのではと答えは、

オリンピック閉幕後に、9月は落ち、10月に突入。ニックホームページの「卓球場&ショップ」のページ、「卓球場、お遊び用品でも、お相い合わせを」、電話で、用具はきちんとしたものを使いたい、という。

「ルールは、ラケットなど用意ならない。中でも、意外なものがボールっ、ボールは、「卓球を遊ばず」は種類によって、弾み方たくさん出ている。

「ボールを発するボールが、不意に対応しようと、不意に対応しようとしてしまった。

ボールは、日本が原因、という。ボールが多いのが、ボールは、お遊び用品でも、ボールは、ボールは、ボールは